岩手県文化財調査報告書第三十七集

岩手県「歴史の道」調査報告

奥の細道

岩手県教育委員会

岩手県文化財調査報告書第三十七集

岩手県「歴史の道」調査報告

奥の細道

序

昭和五十三年度の歴史の道調査の一環として、調査を実施することとした「奥の細道」は、俳人松尾芭蕉、門人河合曽良の行路として有名であります。しかし、岩手県内の路行程については詳細な記録がなく、そのため調査すべき「道」を決定するのに時間を要しましたが、幸い調査員各位が参考文献や古絵図を検討するなど熱心な調査の結果、「道」を決定することができ、周囲の環境を含めて総合的かつ体系的に調査を実施し、その成果を集成することができました。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護および歴史の道研究の一助となれば幸いであります。

なお、調査に御協力いただいた調査員各位ならびに関係市町村教育委員会、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げる次第です。

昭和五十四年三月

岩手県教育委員会

教育長　畑山新信

例　言

一、本書は歴史の道「奥の細道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。

㈠　収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

㈡　調査した事項

ア　道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

イ　江戸時代の国界・藩界及び郡名。

三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員　草間俊一　岩手大学教授

専門調査員　細井計　岩手大学教授

専門調査員　吉田義昭　盛岡市教委文化財専門員

地区調査員（全道）　伊勢善吉　一関市一関公民館長

地区調査員（全道）　千田一司　一関市舞川公民館長

地区調査員（花泉町）　増子恭太郎　花泉町文化財調査員

補助員　高橋哲郎　岩手大学文部技官

補助員　斉藤恵美子　岩手大学教育学部専攻科学生

補助員　大村尚視　岩手大学教育学部学生

四、本書は伊勢善吉と千田一司の共同執筆によるものである。

五、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

六、本書は、文化課が編集にあたった。

目次

序　岩手県教育委員会教育長　畑山新信
例言
まえがき……7
本論……8
古絵図……14
写真……15
地図……29

まえがき

一　「おくのほそ道」について、年来検討してきたところ、従来の諸説は今回我々が調査すべき「道」については詳細を欠き、また、専門的諸先生方においてさえ、決定的な路行程を明らかにしていないことに意見の一致をみた。

一　というのは、『おくのほそ道』の記事が平泉に関する部分を除いて、行路に関する記述が簡単であることによるのである。即ち、芭蕉の『おくのほそ道』には、

平　泉

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞傳て、人跡稀に雉兎蒭蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがえて石の巻といふ湊に出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて竈の煙立つゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのゝ萱はらなどよそめにみて、遙なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸井摩と云所に一宿して平泉に到る。其間廿餘里ほどゝおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を殘す。先高舘にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高舘の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は、衣が関を隔て南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛かな

曽良

兼て耳驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廃空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、甍を覆て風雨を凌。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

尿前の関

南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。（後略）

（「岩波文庫本」による）

『曽良随行日記』には

一　十二日　曇。戸今を立。三リ（長根町ヲ上沼新田町雨降出ル。）三リ安久津（松嶋ヶ此迄両人共ニ歩行。一リ雨強降ル。）一リ馬ニ乗。加澤三リ、皆山坂也。一ノ関黄昏ニ着。合羽モトヲル也。宿ス。

一　十三日、天氣明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。一リ山ノ目一リ半平泉へ以上弐里半ト云ヲモ弐リニ近シ。高舘・衣川・衣ノ関・中尊寺・（別当案内光堂・泉城・さく命色堂）ら川・さくら山・秀平やしき等を見ル。霧山見ゆルト云ヲモ見ヘズ。タツコクガ岩ヤヘ不行。三十町有由。月山・白山ヲ見ル。経堂ハ別堂留主ニテ不開。金鶏山見ル。シミン堂、无量劫院跡見。申ノ上尅帰ル。主水風呂敷ヲシテ待、宿ス。

一　十四日　天氣吉。一ノ関ヲ立。四リ（一ノハザマ岩井郡之内。）（呂合栗原郡也。）崎（藻庭大隅）

（「岩波文庫本」による）

一　この記述にもとづいて、岩手県内の芭蕉の通過道路と、その沿道の文化財などについて精細に論述したものに、金沢規雄（敬称略）の『「おくのほそ道」をたずねて』がある。

一　我々は記事に則して、古絵図を参考に、実地を調査して、長い間かかって検討を加えた結果、金沢の説に納得し得ないという結論に達した。

一　この検討に当っては、地元花泉町教育委員会と宮城県岩ヶ崎町、教育委員会、及びそれぞれの郷土史家と協議すると共に、実地に踏査して検討を加えた。

一　次に金沢の記述を引用し、その批判を通して、所見を明らかにしたい。

本　論

元禄2年5月12日　（陽暦　六月二十八日）

〔推定行程　約十里〕

登　米

Ⓗ3里。

←

▽長たん坂　㊟5丁。

（上沼新田町＝長根町トモ）→登米郡上沼村

〔注＝宿駅なし〕

Ⓗ3里。Ⓗ雨降出ル。

←

▽大手口坂　㊟1丁20間。

涌　　津（磐井郡流郷涌津村）

Ⓗ安久津

㊟32丁32間（但金沢迄）。Ⓗ一リ。

←

Ⓗ松嶋より此迄両人共ニ歩行。雨強降ル、馬ニ乗。

←

▽なら坂川歩渡　㊟4間半・深1尺。

▽金沢川歩渡　㊟幅10間・深7寸。

（中村↑磐井郡流郷中村村）

Ⓗ記載なし。㊟涌津村江18丁。金沢町江12丁

金沢（磐井郡流郷金沢村）

Ⓗ加沢。

㊟清水町江10丁6間。㊟(本)7文・(軽)5文・(夫)4文。

㊟一関町江3里11丁10間。㊟(本)86文・(軽)57文・(夫)43文。

Ⓗ三リ（但一関迄）。皆山坂也。

←

▽金沢川歩渡　㊟幅6間・深1尺。

清　水（磐井郡流郷清水村）

㊟3里6丁42間（注＝金沢より一関迄の距離から、前掲金沢↓清水迄の距離を減じたものと一致しないが、記録のままに写す）。

㊟(本)79文・(軽)52文・(夫)39文。

▽金沢川歩渡　㊟幅1間・深1尺。

←

▽大門坂　㊟2丁30間。

一　関（磐井郡西岩井一関村）　泊。

Ⓗ一関黄昏ニ着。合羽モトヲル也。宿ス。

（Ⓗ曽良随行日記　▽古絵図　㊟宮城県図書館蔵絵図　㊟安永風土記）

以上の所見に対して、その後次の如く訂正している。

〔附記〕　金沢から一関へのコースについて、その後登米町懐古館の元禄の古絵図（宮城県図書館伊達文庫に較べて小規模で精細ではない）を見る機会を得て、つぎのことを発見した。

つまり当時街道が、金沢川北岸を一関へ向かうものと、金沢清水一関と金沢川を二度渡渉してゆくものとがあったことである。この二街道は、大門坂の付近で合流している。とすると一関へ「三里十一丁拾間」

（「磐井郡流金沢村風土記御用書出」）が生きてくる。同時に芭蕉たちは清水村には立ち寄らなかったとみてよい。

本文を訂正できないので、ここに付記して訂正したい。

一　金沢規雄は本文では、芭蕉・曽良の両人は「金沢（加決）から清水を通を通って、大門坂にかかり、北上して鬼死骸村の北で奥州街道に出、やがて、一関城下へ入った。」とみている。大門坂からは、目と鼻の先きに殷賑をきわめていたはずの「有壁」は通過していない。ともいう。

だが「附記」では、前述コースを通過するとすれば、金沢川を二度渡渉することになり、当日の天候からしても「清水村には立寄らなかったとみてよい」と一応訂正している。我々はこの訂正を是認したい。

一　とすると、金沢（Ⓑ加沢）→一関、間はどの『道』を通過したことになるだろうか、という疑問がおこる。そこで、

一　金沢規雄は、当日（元禄二年五月十二日）の天候から推察してか「清水村には立寄らなかったとみてよい」といっているのは、どの程度の天候と降雨量をさしているかは不明であるが、我々は一つの資料として『日本の気象史料一』（原書房刊）のうちから、元禄二年五月十日（一六八九年六月二十六日）の項を所見するに、

(イ)　能登、越中諸国、大雨、洪水、政隣記、五月十日大雨、能州、越中洪水、能州宇出津之内六十軒流失、町之内幅三十四間計之川出来、男女溺死四十七人、牛馬九疋、於輪嶋、大坂御城米舟破損有之　越中之内六十六軒流失惣而流橋四十三ヶ所　御蔵共水入濡米与過半相成川除用水御普請所大半流失。

(ロ)　元禄二年五月二十四日（一六八九年七月一〇日）

越後国　洪水

気象ト天災誌　洪水　水位一丈一尺

(ハ)　元禄二年五月二十九日（一六八九年七月十五日）

甲斐国、大雨、洪水、「山梨県水害史」五月二十九日朝より水出で村へ水差込む、東ノ野は半分仕付不申候（後略）

（『日本の気象史料　三』）

等々の資料及び『曽良随行日記』の五月十二日前後の天候を（あくまで推量）同日記から抜萃のうえ推察してみるに芭蕉・曽良の両人は前述の金沢規雄の「加沢から清水を通って大門坂にかかり、鬼死骸村に出て奥州街道に出、やがて一関城下に入った」とすると、どうしても「金沢川歩渡りを二度」しなければならないことになる。

一　我々には、この説を全面的に否定する確たる資料を持ち合せていない。が一関地方の梅雨入りは6月19日（陽暦）頃、明けは7月23日頃となっている。しかし、年によっては5月下旬に雨天が続くこともあり、このような場合には6月上旬にいったん回復してから本格的な梅雨に入るのが普通といわれている。

一　加沢→一関間の道程を、当日（元禄二年五月十二日）の天候及び当地方に散見できる古絵図、古文書、書留等を総合してみた。また『曽良随行日記』に表われている「戸今・上沼新田町・安久津（涌津）・加沢（金沢）・一関」という地名記録は、他日、他地所の『随行日記』の詳細と比較照合してみるに、甚だ簡略をきわめ、戸今→安久津間の途中記録を抜きにして、ようやく安久津で、強雨のため馬に乗り、「一関黄昏ニ着。」とだけにして『合羽モトヲル』ほどの雨に逢いながら、二関村を素通して一関村に『宿ス。』とは、歴史や地理に詳しいはずの曽良でありながら、歌枕にも出ていない田舎道とはいえ、「皆山坂也。」とだけの記述から、みちのくの旅の寂寥感とともに、雨にうたれて疲労困憊の両人の姿をうかがい知ることができると同時に、金沢規雄説とは別の道程を考えてみざるを得ない。

一　即ち、日記の「安久津松嶋ヶ此迄両人共ニ歩行。雨強降ル。馬ニ乗。一リ加沢、黄昏ニ着。皆山坂也。」を『日本気象史料』及び『曽良随行日記』等々から推考すれば安久津から馬に乗った両人は、強雨の中を、地元の馬子とともに「皆山坂也。」の道を通ることになる。土地感のある馬子は、加沢から水量の増している金沢川を二度、歩渡りすることをさけたのではなかろうかとも考えられる。何故なれば馬子は、一関へ着けば、すぐ涌津へ引返すことであろう。そこで割合平坦と思われる金沢川の北岸を西に向って進むと程なく大門坂にかかり、そこから北上すれば前記金沢規雄説が生きてくるが、もし大門坂口まですすんだと仮定すれば、目と鼻の先きにある有壁町になぜ宿をとらなかったのかという疑問がわいてくる。

一　我々はこの推測をさけ、芭蕉、曽良の両人は、金沢町を過ぎるとすぐ、東往還である一関街道（一関側では石巻街道または金沢街道と云う）へ、直接登りかけたものと考えられる。金沢村端郷の大槻から飯倉山の東麓をめぐり、日向・五合田（五合田）を経て導心塚杉に向い、左回しながら前沢の西に出、東に燕沢、西に牧沢（ともに牧沢村）部落を見ながら北進をつづけ、中屋敷・細田をぬけて追分（現、県立南光病院前）にかかった（これまでは「皆山坂」）とみる。ここで右折すれば滝沢村、金田村（千厩）方面に向う気仙街道となる。この追分より西寄りに北に向い、細見長根に馬歩を進めれば、七沢部落に点在する農家を左眼下にして、間もなく通称カッパ崖（年代不詳。現在は通称屋敷名となっている）へかかり、そこを西北への道を下りながら、風よけ松林から隙見できる三関村の田畑、二関村の町並へと続き、やがて奥州街道へはじめて出、一関城下の地主町（一関村）に入ったものと思われる。（宿場、宿次里数については後述）

一　「宿ス。」の宿は金森利平又は白土氏という（杉浦正一郎校註、岩波文庫刊）が、当地方の郷土史家の中には、その信憑性を欠く、といえどもそれを否定するものもまた資料としては乏しい。その他の説もあるが、裏づけの資料としては今後の調査に待ちたい。

一　一関に「二泊」（随行日記十二日のところに、□の宿泊記号がある。）だが前日の戸今のように検断にも届出ず、そのうえ何某の家に宿泊したとも記さず（二関、一関にも検断あり）、ただ「主水風呂敷（ママ）ヲシテ待」と云って、「主」の名前も記されていない。これをどのように解釈すればよいのか、今後の研究をまつしかない。

一　ついで十三日は「天気明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。」とあり、このところを前記金沢規雄の記述を見ると次の如くである。

元禄2年5月13日（陽暦六月二十九日）、

〔巳尅より申上尅まで。推定行程約4里〕

(6)　一　関

←――――――

(8)　平　　泉（磐井郡西磐井平泉村）

Ⓗ高館・衣川・衣ノ関・中尊寺（別当案内光堂金色堂）・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等見ル。泉城ヨリ西霧山見ゆルト云ヲモ見ヘズ。タッコクガ岩ヤヘ不行。三十町有由。月山・白山ヲ見ル。経堂ハ別当留守ニテ不開。金鶏山見ル。シミン堂、无量劫院跡見。

一　これでみられるように十三日は「天気明。巳ノ尅（午前十時頃）ヨリ平泉へ趣。」とあり、その道筋は一関（地主町）から磐井橋を渡り、山目村の鍛冶町を北上、延喜式内社の配志和神社を左にみて山目町（マチ）（中里村）へかかり、現国道4号線ぞいにさらに北にすすむ。中里村を過ぎる頃には右前方に遠く束稲山（たばしねさくら山）を望みながら大佐（おおさ）・佐野・祇園部落等を通過していったと思われる。

この間はいわゆる奥州街道（当地の元禄古絵図では中海道（ママ））又は（大正二年測図では、陸羽街道といわれている）で、道路の状態も割合よかったろう。曽良はここでもまた十二日記述と違って「一リ山目、壱リ半（伊沢八幡壱リ余リ奥也）平泉へ以上弐里半ト云ヲモ弐リニ近シ。」と割合正確に記録している。さらに平泉に着いてからは、前述(8)平泉Ⓗの如く克明に記述している。

一　その中で杉浦正一郎校註（岩波文庫の）「霧山見ゆルト云ヲモ見ヘズ。（泉城ヨリ西）」の註に、霧山は平泉町にあり。と記述されているが、我々の調査では、霧山は胆沢郡衣川村上衣川地内と確認している。

一　また芭蕉・曽良の両人が泉城まで足をのばしたかどうか、という点についても、本文の「衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落入。」と読合せたうえで、さらに実地踏査した結果次ぎのことが考察された。

一　随行日記の中「月山・白山ヲ見る。」の記述から、両人は「白山」へ入ったとみる。この白山から和泉城跡へは、距離にして約一キロメートル。時間にして徒歩約十五分の位置（平泉町字泉城3）に現存してある。

一　本文「衣川は和泉が城を巡りて……」と随行日記「霧山見ゆルト云ヲモ見ヘズ。（泉城ヨリ西）」を重ねながらの現地調査の結果、本文・日記ともこの情景は、先きに述べた白山よりは望見することはほとんど不可能であったと思う。従って我々は、芭蕉・曽良の両人は、この和泉城まで足をのばし、衣川の流水を目のあたりにしたものと解したい。

一　さらに、衣川をはさんで西側には、嘉祥三年、慈覚大師が白山と同時に勧請したと伝えられる月山（胆沢郡衣川村下衣川）や、衣川柵跡等々一連の歴史上の遺跡が見られる。歌枕・名勝・旧跡を探ね歩く両人にとって、折角みちのくまで訪ねながら、これらを見落すはずがないとも考えられる。

一　「霧山……」については、研究者のもう一歩のつっこみ不足もさりながら、地元郷土史家の間でも「和泉城ヨリ西」方の高い山は、岩手・秋田・宮城の三県にまたがる栗駒山（須川岳）で、前日の強雨のあとの「天気明。」で、山（栗駒山）は霧にかすんで見えなかったのではなかろうかという見解をしている研究家もいる。

一　我々は日記の「霧山……」に続き「タッコクガ岩ヤヘ不行。」の条で、なぜ曽良は霧山と「タッコクガ岩ヤヘ不行。」を並記したかについても考察せざるを得ない。「月山・白山」からはとうてい見えるはずのない「タッコクガ岩ヤ」にふれた点については、あるいは事前に承知していたのか、それとも地元の伝説に「タッコクが岩ヤ」には蝦夷の悪路王が住み、霧山には赤頭という蝦夷が住んでおり、常に往来があって旅人をなやましたという伝説を地元の誰かに聞いたものか。但し、霧山にも「タッコクガ岩ヤ」にも洞窟の跡は現存している。かつてはその両窟は貫通しており、さらに気仙地方まで延びていったという伝承があって、義経生存説の一資料になっていたことは現在でも云い伝えになっている。

一　平泉以北へも行脚の旅を続けたという郷土史家もいるが、「おくのほそ

道』の本文並びに「曽良随行日記」を見る限り確たる資料の提示のない現在はこの説を今回は信憑性に欠けるものとする。

一　次いで翌る十四日の条を再度金沢規雄『「おくのほ道」をたずねて』、を引用しながら詳記する。

元禄2年5月14日（陽暦六月三十日）

〔推定行程　約14里強〕

(9)　一　関

3里11丁10間。(風)(本)124文・(軽)83・(夫)52文(日)4リ。

▽大阪　(図)3丁20間。

▽女ころし坂　(図)3丁2間。

▽ひぢまがり坂　(図)3丁10間。

▽よしめき坂（栗原郡・吉目木坂）(図)1丁12間。

▽一塚坂　(図)2丁38間。

▽ひ×塚　(図)1丁50間。

▽大橋　(図)長8間・横2間。

←

▽てしめん坂　(図)1丁。

(10)　岩ヶ崎（栗原郡三迫岩ヶ崎村）

一　元禄二年五月十四日　天気吉。一ノ関ヲ立。（岩手郡之内。）四リ（一ノハザマ）（岩ケ崎藻庭大隅三リ）（栗原郡也。）三ノハザマ（真坂）（栗原郡也）

岩（此ノ間ニ二ノハザマ有。）崎ゟ金成（註）三迫の岩崎村へ行中程ニつくも橋有。

（「岩波文庫本」による）

一　後記の「曽良随行日記」に記されてあるように天候は良好であったようで、宿を立った両人は、十二日に一関へ入った道を逆に奥州街道を南下する。鬼死骸村に入る手前の台町で奥州街道と別れ、西南に向うこの分岐点入口には「右ハはざま、左はせんだい」の道標があり、附近一帯には瑞雲山豊谷寺（現・無）・白馬山願成寺・満願寺（無）・大慈山祥雲寺・同寺塔頭知證院（無）・瑞泉寺・長昌寺等が櫛比して並び、その下道を西海道（松山街道又は上街道）が宮城県栗原郡岩ヶ崎へと西下していく。

一　分岐点道標より約4キロメートルでさらに大きく西に変る。やがて旧街道と思われる山道に入るが、路幅もさだかでない現状で、一説には「女ころし坂と」いう坂道になり、ほどんど稜線伝いに走っている。この坂道を下った辺より田甫道となり、割合平坦な道が続く。このあたりは旧道がはっきりしており、往時のままと云われている。

一　ほどなく東北自動車道の刈又（カリマタ）ガードをくぐり、再び山林へと入る。人間の背丈以上もある荒れ果てた雑木林を約百五十メートル程北に向って上ると、路幅のはっきり確認のできる道があり、さらに百五十メートル程先へ進むと、一里塚とわかる大きな塚が二つある。（元禄絵図にもこの塚印がある）塚は、その一つは高サ約3メートル、上経が約4メートル、もう一つは高サ約五メートル、上経が約4メートル。この二つの塚が道をはさんで相対している。この山道もここからは下り坂となって二百メートル程して、宮城県金成町へと「道」は続いていく。

以上で、元禄二年五月十二日戸今から一関＝平泉＝一関＝岩ケ崎と、五月十四日までの道筋を調査した結果を報告いたします。

参考文献

1 おくのほそ道　校註者杉浦正一郎（岩波文庫）岩波書店　昭和三十二年
2 おくのほそ道　訳註者頴原退蔵・尾形仂（角川文庫）角川書店　昭和四十二年
3 芭蕉句集　校註者大谷篤蔵・中村俊定　日本古典文学大系45　岩波書店　昭和五十年
4 芭蕉文集　校注者杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清　日本古典文学大系46　岩波書店
5 芭蕉庵桃青　著者中山義秀　中央公論社　昭和四十九年
6 一関市史第四巻　地域史　一関市史編纂委員会　昭和五十二年
7 一関市史第七巻　資料編(11)　一関市史編纂委員会　昭和五十二年
8 諏訪近代史　諏訪教育会　昭和四十一年
9 太陽コレクション地図　江戸・明治・現代4　平凡社　昭和五十二年
10 松尾芭蕉　日本を創った人びと18　著者尾形仂　平凡社　昭和五十三年
11 一関の芭蕉の宿　奥羽史談第十一号　著者小林文夫　昭和二十八年
12 磐井郡金沢流風土記御用書出
13 おくのほそ道をたずねて　著者金沢規夫　宝文堂　昭和四十七年
14 奥州街道宿駅制の研究
15 元禄十二年古絵図　一関藩　八巻一雄蔵
16 元禄十二年古絵図　仙台藩御領絵図　宮城県登米・懐古館蔵
17 文化十五年鬼死骸村絵図　千葉　孝蔵
18 奥州道一　江戸時代図誌7　編者芳賀　登　筑摩書房　昭和五十二年
19 仙台の散策　監修佐々　久　宝文堂　昭和四十八年
20 宮城県の歴史散歩　宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会　山川出版社　昭和四十七年
21 奥州仙台領遠見記　古文書を読む会編　宮城県図書館内
22 芭蕉その旅と俳詣　著者広末　保　日本放送出版協会
23 奥の細道吟行上・下　著者加藤楸邨　平凡社　昭和四十九年
24 俳詣の乞会人　著者四方山径　文潮社　昭和二十二年
25 芭蕉の論　著者山下一海　桜楓社　昭和五十一年
26 芭蕉・蕪村　図説日本の古典14　著者代表白石悌三　集英社　昭和五十三年
27 陸奥道中案内絵図　慶応年間　檀本玉蘭　斎　謙識
28 考証元禄時代　著者稲垣史生　地産出版　昭和五十年
29 国文学「解釈と鑑賞」第43原七号　古典作家の肖像　山下一海　至文堂　昭和五十三年
30 よみがえる秘宝　編集人渡辺　武　岩手日報社　昭和三十九年
31 磐井地方の近世文化　著者八巻一雄　北上書房　昭和四十四年
32 奥の細道をたどる　著者井本農一　角川書店　昭和三十一年

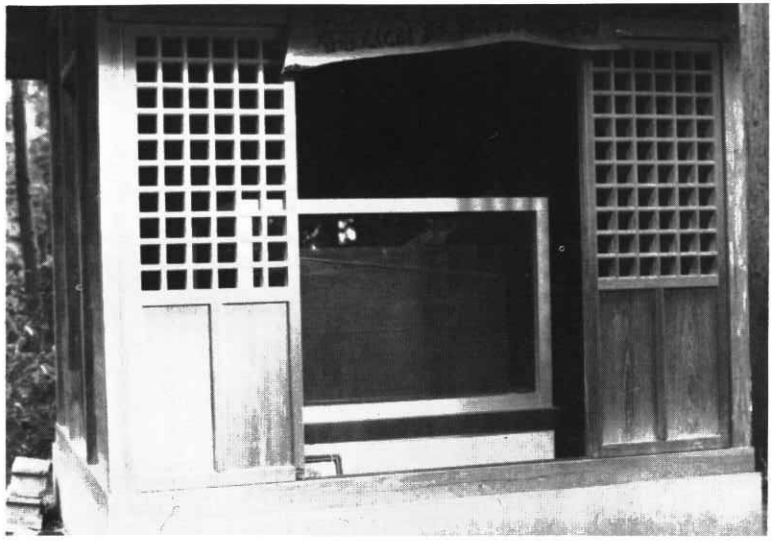
「磐井郡之元禄絵図」（元禄12年3月）一関市・八巻一雄氏蔵

花泉町涌津豊隆神社　鉄五輪出土地

八幡神社(花泉町金沢)

庚申塚(梵字道標)花泉町涌津

鉄五輪塔地輪　正面は狛犬を陽刻で鋳出している　昭和31年県指定(高さ78.78cm　横，たて106.05cm　重さ750kg)

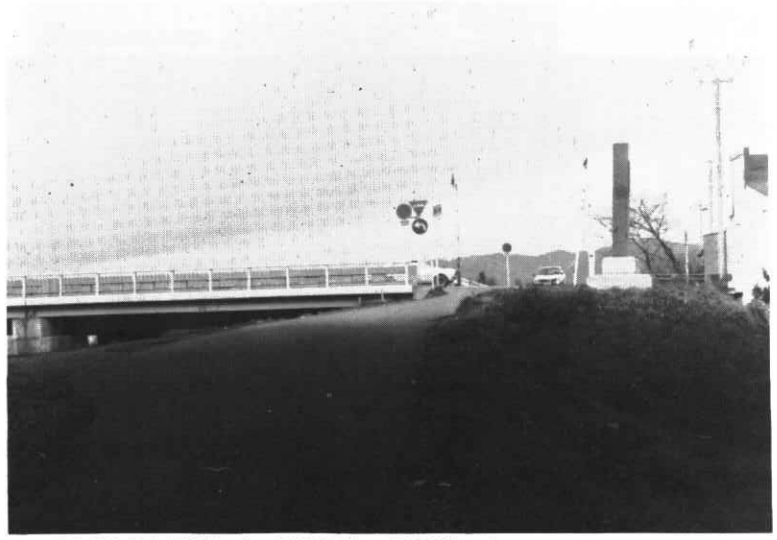


花泉町湧津八幡神社境内にある鉄五輪収蔵庫

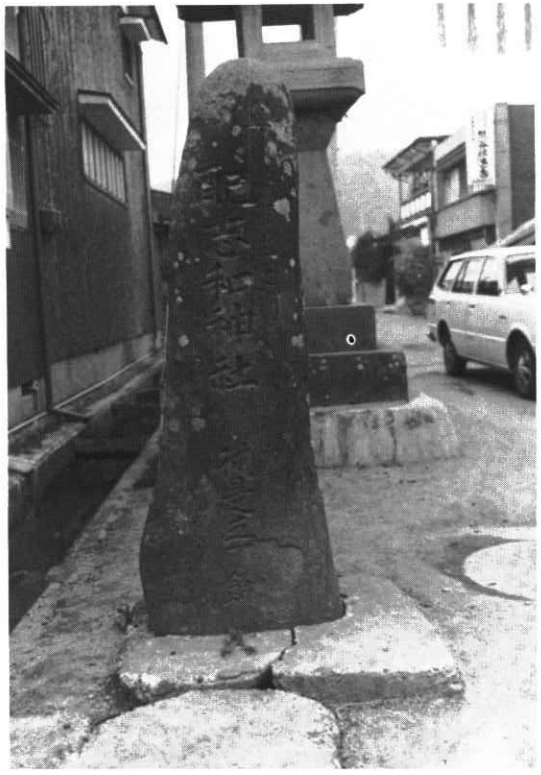
鉄五輪塔地輪

大槻泰常館跡　石巻街道(花泉町金沢地内)

花泉町宝珠院山門



一関市磐井橋東側附近　左　橋脚附近に一里塚があった
右　手前の碑は明治天皇行在所跡



一関市　配志和神社道標　国道４号線山目町地内

一関市地主町旧金森家　芭蕉一行宿泊とも伝う

一関市　配志和神社参道入口

一関市　龍沢寺境内鉄製宝篋印塔

一関市　永泉寺

一関市　配志和神社境内にある芭蕉句碑

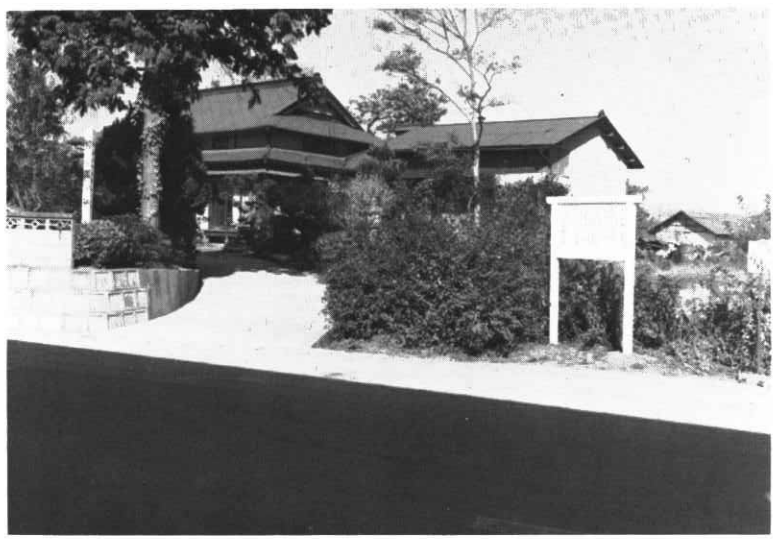
平泉町高館　宝物庫内にある義経廟上梁文

一関市　永泉寺御本尊　木造聖観音立像「藤原時代の作」県指定

高館より北上川・衣川附近を望む

平泉町高館　義経堂　天和３年11月７日伊達綱村公によって再建

平泉町　無量光院跡



平泉町　柳の御所跡附近

平泉町　義経堂内の尊像　江戸時代の作？

芭蕉の句碑(金色堂西)延享3年10月12日山目山笑庵連中建立
「五月雨の降り残してや光堂」

平泉町　金色堂への道

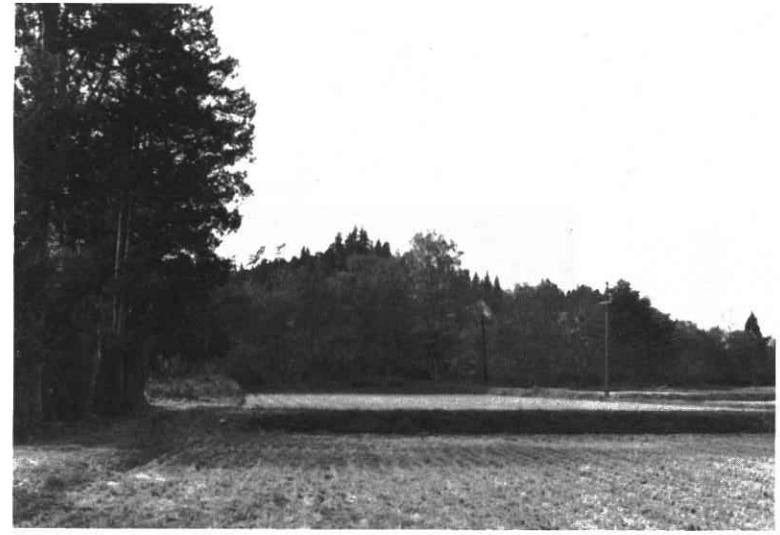
平泉町　中尊寺境内　経蔵

芭蕉の句碑(毛越寺境内)「夏草や兵共が夢の跡」

白山神社(平泉町関山地内)嘉祥3年慈覚大師の勧請と伝う

平泉町　毛越寺大泉池

一関市　願成寺本堂

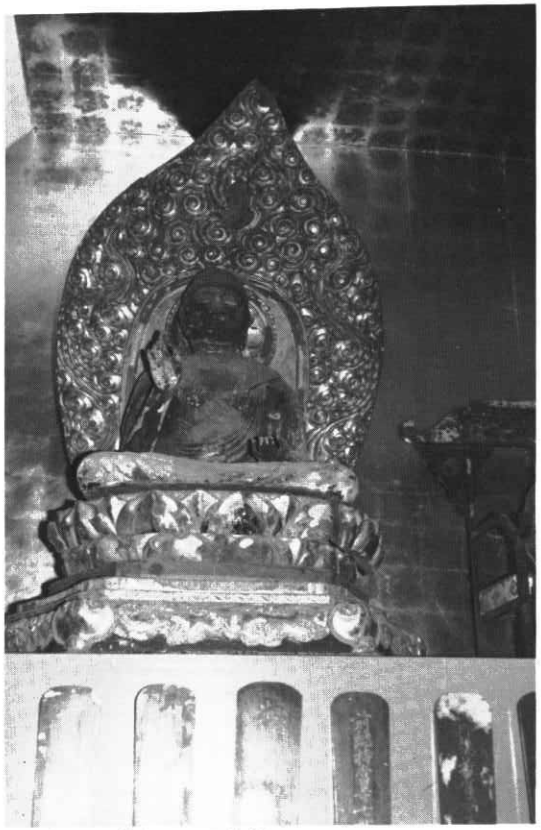


平泉町　和泉城跡　正面の高い山が月山

平泉町　和泉城跡　現在は田圃と化している

奥州街道と松山街道の分岐点附近

一関市　大安寺跡(留守政景公に殉死した家臣の墓)



薬師如来坐像(一関市願成寺)

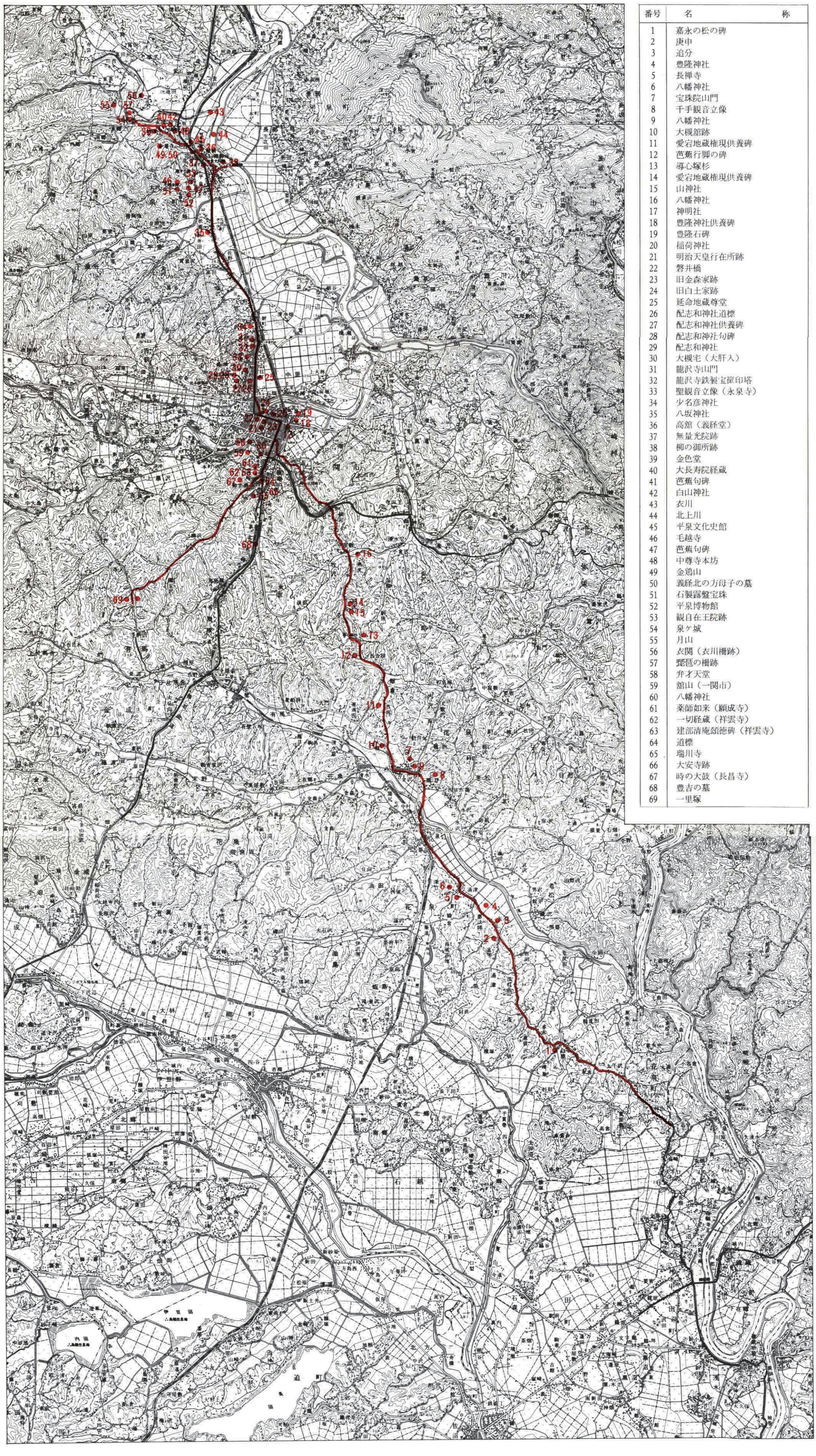
一関市　長昌寺の時の大鼓

一関市　東北最初の解剖記念碑「豊吉の墓」

一関市　大安寺跡　留守政景の墓「慶長12年2月2日」

一里塚(一関市刈又地内)この地点から約500ｍ位で宮城県金成町へ

一里塚(一関市刈又地内)



番号	名　　称
1	嘉永の松の碑
2	庚申
3	追分
4	豊隆神社
5	長禅寺
6	八幡神社
7	宝珠院山門
8	千手観音立像
9	八幡神社
10	大槻舘跡
11	愛宕地蔵権現供養碑
12	芭蕉行脚の碑
13	導心塚杉
14	愛宕地蔵権現供養碑
15	山神社
16	八幡神社
17	神明社
18	豊隆神社供養碑
19	豊隆石碑
20	稲荷神社
21	明治天皇行在所跡
22	磐井橋
23	旧金森家跡
24	旧白土家跡
25	延命地蔵尊堂
26	配志和神社道標
27	配志和神社供養碑
28	配志和神社句碑
29	配志和神社
30	大槻宅（大肝入）
31	龍沢寺山門
32	龍沢寺鉄製宝篋印塔
33	聖観音立像（永泉寺）
34	少名彦神社
35	八坂神社
36	高舘（義経堂）
37	無量光院跡
38	柳の御所跡
39	金色堂
40	大長寿院経蔵
41	芭蕉句碑
42	白山神社
43	衣川
44	北上川
45	平泉文化史館
46	毛越寺
47	芭蕉句碑
48	中尊寺本坊
49	金鶏山
50	義経北の方母子の墓
51	石製露盤宝珠
52	平泉博物館
53	観自在王院跡
54	泉ヶ城
55	月山
56	衣関（衣川柵跡）
57	琵琶の柵跡
58	弁才天堂
59	舘山（一関市）
60	八幡神社
61	薬師如来（願成寺）
62	一切経蔵（祥雲寺）
63	建部清庵頌徳碑（祥雲寺）
64	道標
65	瑞川寺
66	大安寺跡
67	時の大鼓（長昌寺）
68	豊吉の墓
69	一里塚

岩手県文化財調査報告　第三十七集

奥の細道

昭和五十四年三月三十一日　発行

編集　岩手県教育委員会事務局文化課

発行　岩手県教育委員会

印刷　山口北州印刷株式会社